

さようならCamp!

たくさんの思い出をありがとう



No 166
一部 90円

昭和四十五年から平成三年までの二十一年間、MPSの中心行事として卒業生、在塾生に親しまれ、多くの思い出を提供してきた夏期キャンプが無期中止になった。キャンプ実施回数十七回。延べ日数五十一泊六十八日。参加延べ人数九百五十二名。MPSは今年で創立二十七年になるが、中学の部は一年半以上在塾した生徒約七百名、同じく高校の部の生徒約二百名。この数字と比べてみても、いかに夏期キャンプがMPSの大きな存在であったかがわかる。今日の欧米の文化や欧米人の精神が、キリスト教に根ざしてきたように、まさにMPSの「心・知・体のバランスのとれた人間」という精神は、キャンプに凝縮された形で存在してきたと言いうことができる。

現代は個人主義の尊重や価値観の多様化から、協調性や一般通念の欠如が指摘されている。又、外見、物欲、飽食、軽薄短小などの上辺の時代と言われ、本物や本質に触れる機会が少なくなっている。キャンプの無期中止を、家庭の価値観、生徒のニーズにそわないこと、すなわち「時代の流れ」と片付けることができるであろうが、その存在価値や意義は大きい。地球環境問題をきつかけに、自然帰志向が強くまわっている。パブルの崩壊以降、精神的充実を求め、「清貧の時代」というお堅い本が100万部のベストセラーになっっている。このように考えたら、MPS夏期キャンプは、時代に逆行して消えていくのである。時代は逆さようなら、皆さんの思い出をありがとう。

三宅先生 年に一度の 塾生へのメッセージ

去年の十月号もキャンプがなくて、俺のつまらない話を聞いてもらった。「つまらない話」と、謙虚に(?)言ってみたら、結構高校生にはたまにならったようだった。中学生にはちよつと難しかったかもしれないが、今回も一年ぶりの「塾長の訓話」ということで、付き合ってもらおうか。まさか今年もこんなことになると思ってもみなかった。

* キャンプがMPSの行事から消えた今、正直な気持ち、ホッとした思いと淋しい思いが同居した複雑な気持ちだ。第一回のキャンプは俺がまだサラリーマンをしていて、会社の夏休みを利用して(犠牲にして)連れて行った記憶がある。どうしてキャンプをしないことになったかは覚えていない。第一回キャンプに参加した生徒も、もう三十八歳になつていて。君達の両親と同じ年頃だ。みんな元気にやっんでいるかな。折りに触れ、キャンプのことを思い出して、このようにキャンプのことを振り返ると、いろいろのことが走馬灯のように頭の中を駆け巡って行く。若いころは怖いもの知らずで、集団行方不明事件、アワ吹き事件など、今考えるとゾッとさせるような危険なことがいくつもあつた。それにしても、た

た。しかし、それらは張り切り過ぎた結果であり、今となっては懐かしい思い出である。俺はこれでもこだわりを持って生活する方だから、どうせやるなら、キャンプを充実させたものにしたかった。参加者が少しでも楽しんでくれる。キャンプにしろ、いろいろなことを工夫、企画してきた。参加者がそれぞれに、その意図を見い出せたら、そのこのヒントのままそれからの生活になつたりする。考えていた生活塾としてキャンプを授業の一環と捉えて続けてきた。それまで生徒として参加した。実施するのはこんな大変なことをするのだから、異口同音に言う。確かに大変だった。しかし参加者の熱意、スツツの助力があつたから、今日まで続いたのだ。勿論家庭の方々の御理解、御協力もあつた。この場を借りて、みんなに感謝の意を表したい。みんな、何をしにキャンプに来たのかわからない生徒が多くなつてきたことは、とても残念であつた。とはいえ、常識知らずの生徒、協調性のない、いや、いつかキャンプがなくなる日がある。予感して、十五年ぐら前に、このように言葉がはやつて、「タイ

マン君」とあだ名のついた生徒がいた。仲間が忙しそうで、して何もしないのだから、そのような生徒は班の対抗戦でも何の役に立たない。もともと生活エネルギーのない人間なのだ。こんな生徒はその後どうしているのか心配になる。社会に出てうまくやってくれてはいるのだろうか。キャンプの意義を教育評論家のように理屈で説明しようとは思わない。大自然の中で自分のエネルギーを燃やしてくれればよい。班員が団結したり、班対班戦でぶつかり合うこと、楽しさや喜びを知ること、それらを生きていくためにエネルギーを使うことが、どれほど素晴らしいものかを実感して欲しかったのだ。キャンプの話ばかりでは能がない。俺はこのへんで少し違う話をしよう。多くの卒業生がキャンプへの思いを寄稿してくれて、二面以降に特集してある。謹んで拝読するように!

* 二、三年前、こんなことを考えた。これは人から受けて売りでなく、自説である。人間の一生を五千日周期に分ける。五千日は約十四年である。すると一生を、生まれてから十四歳まで、二、三歳まで、四十二歳まで、五十六歳まで、そして五十七歳から死ぬまでの五つに分ける。

一、二面四段へ

一面五段より

当時の私達には、その思惑を推し量って大人のサービスマンを相手に交渉しうる力量はなかつたのです。塾に戻るに三宅先生がガイドブックを広げて待っていました。「どうだった？子浦（伊豆）なんかいいんじゃないかな」と先生が「榎名山に決めてきたんですけど」と私達。先生は、一瞬驚いたようにみえましたが、私達を叱ることもなく、キャンセルの手続きなどをしてくれました。次の年からキャンブがずっと藝科で行なわれるようになったのは、こんなことがあったからかもしれません。さて、その年のキャンブは、とても暑く、海のきれいな子浦で行なわれました。私のいた班は優勝したのですが、準備期間のこの出来事は、初めてキャンブを運営する立場に置かれた貴重な体験として、今でもかなり鮮明に記憶しています。スタッフだった時期を含めて、MPSキャンブには十回以上参加しているのですが、今回、キャンブ無期延期の一報に接し、何かこのことを思い出してしまいました。MPSを離れて久しく、最近の事情は全くわかりませんが、キャンブ無期延期は、これも御時世なのかと寂しい限りです。ただ、MPSキャンブは、連れて行くのも自ら実行するものであり、MPS生の自覚もあれば、いつか復活することもあるのかと思いません。MPS生の皆さん、どうか精進して下さい。

一日宮 和久
九期生 三十一歳
キャンブ参加十回
日本電気労働務
先日、OBの鈴木さんより、キャンブ無期延期のお話を伺い、ただただ驚いています。また、合わせて特集号への原稿の依頼を頂き、何を書いているのか考えあぐねています。が、楽しかったキャンブの思い出を書かせて頂きます。私が初めてキャンブに参加したのは、今を去ること十八年前、中学一年の夏の事です。当時の私は、「皆が行くから僕も行こう」という主体性のない子供で、キャンブで何をやるのかもよくわからないうような、好い加減な気持ちで参加してしまいました。ところが、実際に参加してみると演芸大会、歌謡選手権、マラソン大会など盛り沢山の内容で、あつたという数日間でした。先輩達の意外な一面を垣間



見ることができ、親しみを覚えると共に、その隠れた才能に感心させられたのを覚えています。また歌謡選手権では、アイデアマンの三宅先生のお陰でわけがわからぬまま大賞を頂くなど、うれしい体験もありました。ただマラソン大会だけは走る事が嫌いな私にとつて、とても苦痛でしたがそれを補って余りある楽しさで、いつしか夏のキャンブを心待ちにするようになりました。高校生になりグループのリーダーになると、それまでとは違って、今度は自分が率先としてアイデアを出し、皆を楽しませなければならず、ユモアのセンスの乏しい私にとつて大変つらい事でした。しかし、稀にしかない事でしたが、自分のアイデアがうける事があると演じている後輩諸君同様、自分もとてもうれしく、充実感がありました。スタッフとして参加するようになる時、日頃教室で接している時とは違い、生き生きとした塾生の姿を見ることができ、「彼にはこんな面白い面があるのか」「彼女はこんな家庭的な一面があったのか」などと感心させられることもしばしばでした。中学、高校そしてスタッフと、それぞれの立場でキャンブに参加し、楽しかった事、辛かった事、色々な事がありましたが、これらを通して、勉強だけでは得られない貴重な体験をすることができたと思っています。キャンブに限らず、MPSの色々な行事に参加して得られた数多くの経験があったから

△田 健一
十一期生 二十九歳
キャンブ参加五回
日本経済新聞社勤務
MPSを卒業して十年以上の月日がたつてしまつた。「キャンブ無期延期に寄せて」というテーマで原稿を依頼され、改めてMPSで過ごした当時を思い返してみたい。キャンブに限らず、MPSには年間を通して、様々な行事があった。どちらかといえば、それらに積極的に参加していた私にとって、蟬が鳴き始めた季節になつた「今年もまたキャンブの季節になったな」と、ご



らこそ、MPSは私にとってただの学習塾ではなく、生活塾になりえたのだと思つています。中でも最大の行事であるキャンブが無期延期になつてしまふ事は、我々OBにとつて非常に淋しい事であり、在塾生やこれから入塾してくる後輩の皆さんにとつて、残念な事であると思つています。

年齢の異なるメンバーで班が結成される。マラソン大会に向けて、益田団地を駆けめぐり、演芸大会のリハーサルを班長の家で繰り返す。出発の朝、不安と期待に胸膨らませバスに乗り込む。毎朝眠たい目をこすりながら食事を作り、夜は怪談話にふるえていた。雨でマラソンが中止になればと雨の降る中、自分だけはやはり悔しかった。自分の班の演芸が一番つまらなかったのは、こうしてキャンブは、あつた。バスでは、小田原が近づくとつれづれ、いつも感傷的な気持ちになつた。夏のキャンブは、いまだに、中学時代の夏の一幕として、心に刻まれている。参考資料として送られてきた「えむびい」のNo.165の中に、「心・知・体のバランスのとれた人間をモットーに掲げた生活塾」この言葉の意味が、十年の歳月を経て、改めて実感できた気がする。学ぶことも遊ぶことも、同じく人間の日々の行いである。MPSの一員として、教室で学ぶことも、キャンブに参加することも、当然のこととして受けとめられていたのだから、MPS一人一人違つていても、塾生一人一人違つていても、所属する組織が目指していることと、自分が求めていることとが一致した方が、より充実した日々を送れることもまた、確かであると思う。

四面一段へ

二面五段より

若石林 孝好
十一期生 二十九歳
キャンパス参加五回
欄日興システム

ここ数年のキャンパスに乗り、御多分に洩れず私も年に数回キャンパスに行き、その度にMPSのキャンパスの事を想い出して来た。そんな時MPSのキャンパスが無期延期という話を聞き、非常に残念に思っています。昭和五十二年から五回程参加したキャンパスは、他のどのキャンパスより、より鮮明に多くの事を記憶している。キャンパス期間中は勿論、キャンパス地(藝科)へ行くまでの過程が、また楽しかった。朝はマラソン、昼は演芸、歌謡選手権の練習、夜はテレビを見て「ウケるネタ探し」こんな毎日夏休み中練り返していた。今から思えば演芸の企画力、マラソンの体力、クイズ大会の知力(?)、歌謡選手権の歌唱力、三宅先生御招待の夕食の接待力、これら全てが社会人として、今の自分の源、いや全てと言っても過言ではない。キャンパスでは毎年何かが起こるといふ期待感に胸を膨らませていた事も忘れてはならない。数々のスーパースター怪物、妙怪が誕生した。マキがわり切った腕をマキがわりに切った腕を怖のどん底に落とし入れた某女史。高校生身でありながら酒を飲みすぎ、朝まで便所

で寝ていた奴。毎年演芸の度にブルマーをはき続けた奴。今考えるとこいつは「ブルセラ」のはしりだったのかも知れない。全てが今から十五年も前の話ですが、次々と思いがよみがえって来て枯れることはない。ただ一つ言える事は、キャンパスの全てが、回りの押し付けではなく、各々自分の為に作り上げたキャンパスという意識がより一層キャンパスの面白さを高めている。今の塾生にも、この決して忘れる事のないキャンパスを是非、体験してみてもらいたい。今でも機会さえあれば、昔懐かしいキャンパスに参加してみたいと思っているOBは私だけではないと確信している。



伊豆浦俊夫 主婦
十一期生 二十八歳
キャンパス参加四回
八月下旬、冷夏のため姿を消してしまつたセミやカブト虫の事として君臨していたキ

キャンパスまでなくなつてしまふというニュースが流れてきました。今の生活は考えられないので、とても寂しく思います。さてキャンパスで連想するとは、いろいろあります。女の私は料理に悩まされたのが今だに心に残っています。(ハンバーグを作る度に、生焼けのハンバーグを思い出し恥ずかしくなる程です。)ただ空腹を満たすだけではなく、審査の対象にもなつていたのでも余計プレッシャーがかつたものですね。中一くらいなら先輩方の指示に従うだけです。もいかず頼られるのは嬉しういけれど内心とても困つていました。料理上手イコール女らしいと思ひ、見栄とそれに伴わない実力との間で揺れ動く私です。なにしろ当時の私は、油がハネるのも怖かったくらいです。今になれば笑い話ですが、それでも一杯だつたのです。(しかし某OBに今だにその頃の失敗を突っ込まれる冷や汗タラタラのかわいそうな私...) キャンパスが近づく料理に目覚め、終ると次のキャンパスで料理とは殆ど無縁の生活をしていたように思います。また私の場合、後にスタツフの一員として参加したのですが、その時には生徒として楽しんでいた頃には見えなかつた色々な苦労を目の当たりにし、改めて先生方のキャンパスに賭ける熱意に驚かされま届いた準備。そしてキャンパスが無事終つても、その後の新聞発行まで、夏の数日間のた



めに何ヶ月もかかつているとは思いませんでした。生徒の自由はこんなに至り尽くせりのキャンパスはないと思ひました。今は、こんなキャンパスを築き上げてくれた先生をはじめOBの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。最後にMPS報のようにキャンパスも復活することを祈ります。

山本 博文
十二期生 二十八歳
キャンパス参加六回
欄横浜銀行勤務
八月十七日、東京外国為替市場でドル1100円四角更新となり、円が市場最高値を更替した。円高のニュースはテレビや新聞でも大きく報道されたが、そんなにもたいへんなことかと思つた人も多いだろう。輸出企業は円高で悲鳴をあげている。自動車、電機、鉄鋼、科学といった輸出産業や素材産業はドル100円五円から一〇〇円をめぐり、合理化を進めてきた。それ以上に値を上げてきた。自動車の場合、なるか値上げをしなければならなくなる。自動車の場合、

これ以上の値上げは国際競争力が奪つた。ただでさえ自動車も売れなくなつてきているのに、私にとつて、もう一つ大きなニュースが飛び込んで来た。「キャンパス無期延期である。」実社会に出て五年目を迎え、社会的責任と公的役割の遂行が、従来にも増して強く要請されていく金融機関に勤める者にとつて「心・知・体のバランス」はとつても大切なものであると痛切に感じている。その経験若くして中学生の頃からMPSのキャンパスを通して養えたのは今改めて深く感謝している。銀行員として「心・知・体の鍛えられた人間」を目指している私である。諸君も楽しく、「心・知・体」を豊かにできるチャンスである。キャンパスに参加しないのは、実社会に出て後悔するということである。私は昨年までリクルーターとして就職活動している大学生と面接を毎年してきたが、大学での成績などは一切聞かない。きちんと人の目を見て話ができ、こいつなら一緒に仕事をしたいと思える学生を上に推薦するのである。リリーダシップがあり、MPSのキャンパス大賞をとれるような人材をまさに企業は欲しがっているのである。キャンパス中止は時代の流れ、という人もいるが、時代は、知力も、当然備え、同時に心体とも鍛えられた若きリリーダを求めているのだ。MPS生は是非、将来のリリーダになつて欲しい。

